

---

# Hugging You!

久芳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Hugoton Yomi!

### 【ノード】

N5732J

### 【作者名】

久芳

### 【あらすじ】

七海の通う羽生高校で、日常的に交わされる親しみをこめた挨拶  
は、ハグ　抱擁だった。いまだその習慣になれるものできない  
七海は、密かに思いを寄せている相手が、誰とでも抱擁を交わすこ  
とに苦痛を感じ始めていた。そしてある日、七海は雅行に、ハグを  
しないと宣言してしまう。

どちらからともなく、まるで吸い寄せられるかのように、二人は校門の前で抱き合った。

背の高い男子の首に腕をまわす女子の長い髪が、風にふかれて舞っている。折り目のしつかりついたブリーツスカートからのぞく脚は、朝日を浴びてまぶしく光っていた。

登校ラッシュで、生徒があふれている校庭。その中で一人は、公衆の面前にもかまわず熱い抱擁をかわしていた。

周囲の生徒も、教師も、それを気にすることはない。むしろ、そういう光景は校庭のあちこちで見られていた。

男子と女子、男子同士、女子同士、教師同士、教師と生徒。後輩や先輩も関係ない。みんな、顔を合わせれば当たり前のよう抱き合っている。

先ほどの一人だけ、今はもう離れてほかの生徒と抱き合っている。軽く腕を回すだけの軽いものもあれば、締め技かと思うほど力をこめているものもあった。

抱き合うとか抱擁とか、そういう固い言葉ではなく、ハグ、と呼ぶのが自然だった。

新学期が始まり、入学式があり、数ヶ月。ようやく学校になれ始めた一年生も、まだ積極的にハグができないようで、先輩からのハグに遠慮がちにこたえている。

まるで去年の自分を見ているようで、教室の窓からのぞいていたあたしの口からは、自然と笑みがこぼれていた。

大丈夫、すぐになれるよ。

「七海、ななみおはよ！」

毎日抱きつかれれば。

1

開け放った窓の枠に肘をかけていたあたしは、横からの衝撃に思わずよろめいた。

「おはよっ、おはよう七海！」

肘ごと豪快に抱き寄せられ、あたしは身体を支えきれず頭を窓にぶつけてしまふ。いて、と駄くのも気にせず、彼女はあたしを抱きしめたまま頬をすりよせてきた。

「……おはよう、千鶴」

今日も元気だね、とあたしは彼女 千鶴を抱きしめかえす。校庭に漂う若葉の香りをそのまま引き連れてきたらしく、一瞬、たんぽぽを抱きしめたような錯覚を感じた。

ハグ。それがあたしたちの通っている、羽生高校の日常だった。なにがあることに、ハグ。おはようの挨拶にハグ。さよならの挨拶にハグ。おめでとうのハグに、ありがとうのハグ。理由もなくハグをしても全然かまわない。

決して校則というわけではないけれど、生徒も教師も、みんなが『ぐる自然にやつていいこと』。毎年入学式には「I Hug You !」と愛の告白にかけた文字が各教室の窓に一文字ずつ貼られて、新入生歓迎の言葉にしているぐらい、ハグは学校に溶け込んでいた。

他校から『ハグ高』と呼ばれるほどに有名で、それを由当てに入学していく生徒は毎年増加する傾向にあるらしかった。

3

「……ちょっと、ハグ長すぎない？」

抱きついたまま離れない千鶴を、あたしは引き離しにかかる。彼女と違つて、あたしは家に一番近いからこの学校を選んだのだった。

「もういいでしょ、離れてよ千鶴」

「だつて、七海にハグするの好きなんだもん」

今、誤解を招く発言をしなかつたかな？

「七海、チヅみみたいに筋肉ばっかりじゃないんだもん。筋肉の上に適度な脂肪があつて、なで肩でさ。色も白いし、いいにおいだし」  
小中とバレーで鍛えてきた千鶴の筋肉は、高校へと継続された部活動により、さらにたくましくなつている。それでも小柄でよく動き回る彼女は子犬のようでかわいらしく、短く切つた髪は思わず撫でたくなるようなやわらかいくせがあった。

「ね？ 雅行まさゆき」

好奇心旺盛な丸い瞳が、ふいに、今までしへ教室にはいつてきたばかりの彼に向けられた。

突然話をふられた男子 雅行が、軽く目を見開いてとりあえず鞄を自分の席に置く。窓際の一一番後ろが雅行の席。その前があたし。隣が千鶴と、縁があるのか一人とは一年のときから席が近かつた。今までのあたしたちの会話から自分が出すべき答えをはじき出すまでけつこうな時間をかけて、彼は大きくひとつあくびをする。何をしたのか、そのつんつん頭には葉っぱがついていた。

「……その答えかたによつちや、俺が変態になるぞ」

まじめに引き締められた切れ長の眼が、言い終えてからにやりと笑う。そして彼も、あたしにハグをしてきた。

「オハヨ、七海」

千鶴ほど熱烈ではないけど、それでもしつかりと力をこめて抱きしめてくる。ほかの男子は女子に遠慮して軽く腕を回す程度なのに、彼は誰に対してもしつかりとハグをしていた。

「……おはよ」

かすかな痛みを感じながら、あたしはその広い背中を叩いてハグ

をかえす。そして振りほどいたように見えないようになり、まだハグに不慣れであるように、すぐに雅行から離れた。

「もう一年なんだし、いいかげん七海もなれろよ」

いつもの言葉に曖昧に笑いながら、あたしは千鶴と雅行のハグを見た。

同じ中学出身で、気心の知れている一人は、ハグに遠慮がない。一人がやるととても自然で、大好きです、とお互いに言っているようなあたたかい抱擁だった。

痛い。

「……七海？ どした？」

よほどあたしが変な顔をしていたのか、千鶴と離れた雅行が心配そうに長身をかがめてくる。決して自分からそりすことのない瞳が、まっすぐにあたしを見ていた。

「なんでもない。雅行、頭に葉っぱついてるよ」

笑顔を作つて、あたしは自分が唇を噛もうとしていたことに気づいた。雅行の頭に手をのばして葉っぱをとると、彼は「もうない？」とさらに頭を寄せてくる。

「なんでこんなに葉っぱついてるの？ 制服にもだよ？」

「近道使つたんだ。誰かの家の庭、突き抜けてきた」

すべてとり終えると、雅行が顔をあげる。にこりと笑う唇から白い歯がのぞいて、彼は両手をあたしにのばした。

「ありがとう」

予想外のハグに、あたしは身体をそのまま預けてしまった。

制服ごしの彼の胸板に、頬がくっつく。染みついた新芽の緑と、歯磨き粉の香りが混ざり合つてあたしを包む。背中にはわされた手が、とても熱い。

痛い。

今度こそあたしは、雅行をふりほどく。突き飛ばしたといつてもいいくらいの力で、彼の長身がぐらつとよろめいた。

「七海……？」

驚きの表情を浮かべる雅行に、あたしは口を開く。声がかすれて、ぱくぱくと動いた唇はほとんど言葉にならなかつた。

「あたし」

もう一度。今度ははつきりと声を出す。駄々っ子みたいに高い声は語尾まではねあがつて、自分でも驚くぐらい教室に響いた。

「あたし、もう、ハグしないー！」

雅行と、ハグがしたくない。

この学校でハグをしない理由はいろいろあるけど、おおまかに分ければ一つにまでしぼりこめる。

人が苦手か、恋愛がらみかのどっちか。

潔癖症とか、対人恐怖症とか、そういう人はめったにこの学校を選ばない。だからあたしのハグしない宣言は、恋愛がからんでいるのがばれただつた。

あたしたちのクラスには、彼氏がいるから、ほかの男子とはハグしないと明言する子がいる。ハグを恋人のためだけにとつておいでいる人は学校にたくさんいる。残念ながら、あたしに恋人がいるという情報はどこからも流れていらない。

誰かに想いを寄せている生徒も、ハグを拒むことがよくある。それが相手への宣戦布告のようになることもあるし、気を引くための行動ともされている。あたしはそのつもりがなかつたのだけど、自分のやつた行為は、まさしくそれにあたつてしまふわけで。雅行が好き。そう、みんなの前で宣言してしまった。

当の本人は、意味がわからず『……え?』とぱちくりしていたけど。

ななみ? と続いた雅行の声は本鈴にかき消されて、結局あたしの宣言は曖昧に終わってしまった。

S H R、基礎学習、現代文と、時間は無情にも淡々とすがっていく。あたしはもう雅行と話せないと不安になり、隣の席でちらちら視線を投げかけてくる千鶴にも曖昧な笑みを返すしかなか

つた。

けれどその心配は杞憂だつたようで、三時間田の家庭科が終わりに近づいたころ、あたしは後ろの席からペンで背中を小突かれた。

「七海、七海

雅行だ。そう思つと、身体から変な汗が吹き出でてくる。こわばる身体をきしませながら、あたしはおそるおそる振り向いた。

「……なに？」

「プリント見せて」

お願い、と目を細める彼の頬には、今まで寝ていたらしく教科書の跡がくつきりとついている。はじめのころに配られたプリントのことはもう黒板に書いていなくて、ずいぶん前から寝ていたのだなとすぐにわかった。

プリントを渡すと、すぐ返すから、とつしにかかる。緊張した自分があほらしさと思つべから、雅行の態度はいつもと変わらなかつた。

『もともと七海、ハグ好きじゃなかつたからな。無理強いしないし、別にいいよ』

戻ってきたプリントのすみに、あまり上手とはいえない文字でそう書かれている。しかも鉛筆ではなく、赤いボールペンでだ。授業の最後に回収したらどうしてくれよう。

どうやら彼は、あたしの宣言を『誰ともハグをしない』と受け取つたらしい。後ろを振り返つてみれば、無邪気に小首をかしげてくれる。

鈍い。

あたしは安堵とともに、脱力してしまつ。

この数時間で、すっかり胃が痛くなつてしまつたのに。ストレスで肌が荒れそだつたのに。

一緒に落書きされたいんだけドラえもんに、あたしのはび太君になつて、涙を出してすがりつきたい。

タイムマシーンを出して。

そうしたら、あんなこと言わないから。痛くても我慢するから。  
雅行がほかの子とハグしても、あたしとハグしても、痛いなんて  
思わないから。

「やつと進展したね、七海と雅行」

千鶴に言われて、あたしはひとつ、ため息をついた。

「あんなことしなければよかつた……」

「いんじやない？ いい加減見てるこいつちがイライラしてたからね、  
動いてくれてよかつたとチヅは思うなあ」

目線は決してこちらに向けず、千鶴はしゃんとまっすぐ立っている。あたしはもう一度ため息をついて、パンツが見えないよう注意しながらしゃがみ、ボードに「」を乗せてぼんやりと人並みをながめた。

羽生高校の生徒がよく利用する駅。駅前はいつも人通りが多く、みんなあたしたちをしげしげと珍しそうに眺めていた。

あたしたちと同じ濃紺のブレザーが、駅前や近くの街をちらほらと歩いている。その手にはそれぞれスケッチブックや厚紙、ベニヤ板やダンボールでつくったボードを持っている。それを高く掲げたり、胸の前に構えたりして、みんな思い思いに道行く人たちにアピールしていた。

帰宅途中の生徒にまぎれているけど、ボードを持っているのがあたしたちの仲間だ。書きかたや色合いは十人十色だけど、そのボードにはひとつだけ、共通している言葉がある。

FREE HUGS

あたしや千鶴、それからボードを持つ仲間たち。あたしたちはみんな、羽生高校の『FREE HUGS 同好会』に所属していた。

FREEHUGS。あたしがその存在を知ったのはけつこう最近だった。

FREEHUGSとはなにか。それを説明するのはちょっと難しい。なぜなら受け取りかたが人それぞれで、一概にこうだとは言いたれなものだから。

街頭で見知らぬ人と抱擁を交わす。それによつて互いの喜びや悲しみを分かち合つたり、あるいは愛や平和を生み出そうとしたりする活動。と、ネットでは説明されていた。

人それぞれ感じかたが違うのだから、みんな何かしらの理由や目的があつてすることで。漠然と言つてしまえば、ハグをすることでの『なにか』を感じあう行動、とでも言つてしまおうか。

その活動が今、世界中に広がろうとしていた。

活動の一員であるはずのあたしは、実はまだ、自分がなんのためにしようとしているのかよくわかつていない。

ただ、千鶴やほかのメンバーに見せてもらつたネットの動画を見て、たとえよのないあたたかい気持ちが胸にこみあげてきたのは確かだつた。そしてあたしもやろうと決意して、同好会に入つたのはいいけれど、実際はまだあまりハグをすることができるていない。

同好会の活動といえば、だいたいこうやつて、人通りの多いところで人々とハグをすることだつた。あたしもこうしていつも千鶴の隣に立ち、ボードを持つてアピールしている。何度か道行く人とハグをしそうな気配があつたこともあつたけど、その場になつて急に足がすくんで、みんなかわりに千鶴とハグをすることになつっていた。あたしのことを置いといて、実際にハグをしてくれる人がいるのかといえば、とりあえずたくさんではない。まだこの地域には、あまりFREEHUGSが浸透していなかつた。

ほとんどの人はあたしたちを怪訝そうな目で見て通り過ぎ、あるいは無視して、別の人には指をさしてげらげらと笑つている。いわゆるハグ高を知つてゐる人たちはああほらと興味を示していたりするけど、いざハグしてくれるのはほんの一握り。ボードを持つあたし

たちから無理にハグしたりするのではなく、むこうから来てくれるのを待つのがFREE HUGSだった。

人間、そう簡単に見知らぬ人と抱擁を交わすことなんてできない。その気持ちはあたし自身がよくわかっている。

家族とハグできるかと訊かれたら、あたしはできないときっぱり答える自信がある。恥ずかしい、照れくさいで頭がいっぱいになつて動けなくなる。もちろん親だって、突然娘に抱きつかれたら驚くに決まつて。

家族とできないことを、何も知らない人とさも当たり前のようにする。そのことに、羽生高に入学したてのころのあたしはとても抵抗を感じていた。なんでみんなそう簡単にハグできるのか、理解できずにただただ戸惑つていた。

けれど毎日のように学校でハグするうちに、なんとなく、その心地よさのようなものがわかつてくるようになつた。おはようの挨拶と一緒にハグすると、自分がとてもやさしい気持ちになれた。お互いのあたたかさが混じりあって、言葉にはできないなにかを分かち合えるようになつたとき、あたしはハグが嫌じやなくなつた。

たとえば、千鶴とハグしたとき。お互い腕をまわして抱き合つたとき、胸の中が嬉しさのような喜びのような、あたたかいものでいっぱいになる。壁のようなものがなくなつて、なぜだか涙まで出できそうになることもあつた。ぎゅっと抱き合つことで、自分の抱えている小さな悩みやもやもやが、すっと溶けてなくなつてしまふうな、そんな癒しがあつた。

でも、それをFREE HUGSでも同じようにできるかといふとあたしにはまだ難しくて。お互いを知つているからこそハグができるわけで。千鶴のように街頭に立つて知らない人とハグする勇気は、あたしにはまだ、足りていない。

今のところ、活動の最中にハグをしに来てくれるのは、同じ学校の生徒が大半だった。あとはテレビやネットでFREE HUGSを知つた人。それから、あたしたちを見て好奇心をかきたてられた人。

そもそも同好会ができたのだって今年の春。結成わずか数ヶ月なのだから、地域にも学校にも、浸透するにはもう少し時間が必要だ。

「……ねえ、千鶴」

「なあに？」

話しかけると、千鶴は興味を示している少年に、腕を広げてAPI-ルしていた。あの学ランは近くの中学校だ。FREE HUGSの存在を知っていたようで、行こうか行くまいか悩んでいるらしい。千鶴は視線をおくるあたしにちりりと舌を出して、そつと彼に近寄つていった。

少年は千鶴に、不安と期待が入り混じった顔でなにやら訊いている。たぶん、この活動が自分の知っているものと同じなのか確認しているのだと思う。そしてそれに千鶴は大きくうなずいて、ふたりは両手を広げてハグをした。

学校ではいつも見慣れている光景だけど、それこそ今は本物の公衆の面前。突然のハグを見て驚く人もいれば、冷たい視線を向ける人もいて、そして中には微笑んでくれる人もいた。ほかの場所では学生たちみんなでハグするから、まるで人だんごのようになってしまっている。

晴れ晴れとした笑顔で戻ってきた千鶴は、あたしの表情のひどさに肩をすくめて、同じように隣にしゃがんだ。

「そんな顔してたら誰もきてくれないよ？」

「今はそんな気分じゃないの」

じゃあなんで今日の活動に参加したのか。こうして千鶴と話をしたかったからだ。

「ねえ、千鶴」

「だから、なあに？ どうせ雅行のことでしょう？」

とうの雅行も、同好会の会員だ。けれど本日はお休み。学校祭前

なので、本業の生徒会の活動で忙しそうだった。

同好会はほかの部活にはいついてもできるから、千鶴や雅行のようにかけ持ちしている人も少なくない。会員は地道な呼びかけで少しづつ増えてきているけど、学校のハグと外のハグは違うもの。そんなに多くは集まらなかつた。

ちなみにあたしは、同好会以外に何もやつていない。

「まあ、そななんだけどさ」

「いいじゃん。七海がああでもしなかつたら、たぶん卒業するまであのまんまだつたと思つよ?」

千鶴は前から、あたしの気持ちを知つていた。一年の冬休みに彼女の家に泊まつたときに、『七海つて雅行のこと意識してるでしょ』と言っていた。そのときあたしは否定しなかつたし、千鶴もそれ以上何も言わなかつた。その後も、変に仲を取り持とうとしなかつた。

お互に今までそれについては深く触れてこなかつたから、いざ話をするとなると、どうしていいのかよくわからなくなつてしまつ。『雅行はにぶいからねー。告白するなら七海からじやないとダメだね、きっと』

「告白、かあ」

「あたしは頭を抱えた。」

雅行のことは好きだ。それだけは確信している。だからといって、それでどうこうするつもりはない。告白して、ふられて、お互い気まずくなるなんて絶対嫌だつた。

だからこのまま卒業まで、仲良く友達をして、ハグをして、話ができるばよかつたはずなのだけど。

「なんであんなことしちゃつたんだろう……」

「やきもちでしょ」

すばり。千鶴の言葉はど真ん中だつた。

「雅行がほかの人とハグするのが嫌だつたんでしょ? それと同じように自分もされるのが嫌だつたんでしょ?」

そう。まさしくそのとおり。

だからといって、あたし以外の人とハグしないでなんて言えるわけがない。そんなのあたしのわがままで、雅行に押し付けるべきことではない。

そもそもあたしは、雅行の彼女でもなんでもない。ただのクラスメイトで、ただの友達。あたしもそれを望んでいた。

「……頭がぐちゃぐちゃになる」

「やつてしまつたことはもうどうしようもないんだし、前向きに考えようよ?」

ねつ、と千鶴があたしを立ち上がらせる。そしてひとつ、ハグ。やわらかくて力強い腕に包まれて、千鶴の香りでいっぱいになる。彼女の腕の中にいると、あたしはいつも心にエネルギーをもらえるような気がした。

「ねえ、千鶴」

「なあに?」

「FREEHUGSやって、変な人に触られたこととかないの?」「あるよ」

さらりと言つて、千鶴はあたしから離れた。

そしてそのまま、ボードを掲げて人の波に飛び込んでゆく。ボードに興味を示した人がいたようで、その場で膝について大きく手を広げ、相手が来るのを待つた。

ややあつて、腕の中に小さな女の子がどびこんできた。

前に見た動画もこいつだつた。ハグをする人同士がみんな笑顔で、あたたかくて、見ているこつちまで胸がほつとするような、そんな優しい気持ちでいっぱいな光景。それが今、あたしの目の前に、たしかに存在している。

女の子は満足したようで、お母さんのもとに戻つてゆく。それにばいばいと手をふつて、千鶴もまた、あたしのもとに戻ってきた。

「今みたいに無邪気にしてくれるならいいんだけどね。あつたよ、離してくれないこととか」

「そのとき、どうしたの？」

「啓一と一緒にだから、助けてもらつたやつた」

えへつと千鶴は舌をだす。あつけらかんと、実に彼女らしく全然氣にも留めていなかつた。

「だつてそれ以上に、楽しいんだもん。ありがとうとか言つてもらつたらもう、胸触られたこととかどうでもよくなつちやう」  
かといつて千鶴は、あたしに FREE HUGSを無理強いてくることはない。同好会に引つ張ってきたのはまさしく彼女だけ、あたしが自分からできるようになるのを見守つてくれた。

「あ、啓一だ」

おーい、と千鶴がボードを持った男子に声をかける。すると彼はこちらに気づいて、人の波をかきわけ駆け寄つてきた。

そしてそのままの勢いで千鶴を抱き上げ、ラブロマンス映画のワンシーンみたいにくるくるとまわる。さすがにこれには、あたしも周囲の人たちも驚いていた。

本家本元。彼　啓一くんこそが、この同好会の会長だ。

「よ、なつちゃん」

「こんちわ」

同級生のわりに、啓一くんには妙な落ち着きがある。銀縁眼鏡に長めの前髪を斜めにたらして、きつちりブレザーを着ていると、雅行と同じものを着ているとは思えないぐらいに大人びていた。

啓一くんはあたしを見て、ちょっとためらう様子を見せた。だからあたしは、自分からハグをする。もちろん千鶴がしていたような熱烈なものではなく、軽く腕をまわすハグだ。

同じハグ高の生徒には、駅前でも、学校の延長のような感じで、気軽にすることができた。

こうしてハグしてみると、やはり雅行は背が高いのだなと思つ。ハグする力も、啓一くんは遠慮がちだつた。身体もすぐに離れた。

「なつちゃん、今日、誰かとハグした？」

「七海と学校の子たちと、啓一くんだけ」

それに、啓一くんは笑うだけだつた。そつかそつかと笑つて、きてくれてありがとうと言つ。礼儀正しい彼はパソコン部に所属していて、たまにFREE HUGS活動の様子を動画や写真に撮つてはネットで公開しているよつだつた。

「チヅたち、そろそろ帰るね」

「気をつけるよ」

同好会の主な顔はこのふたりだ。その補佐にあたしと雅行がいるような形になつていて。一年生はまだ学校になれたばかりだし、三年生は受験が待ち構えているので、同好会をまとめる余裕がなかつた。

「チヅのクラスは学校祭どうすんの？」

「チヅたちは模擬店だよ。でもチヅは女バレのほう行くから、詳しいのは七海のほう」

一年生の宿泊研修が最近終わつた。そうしたらもう次の行事は学校祭。だから雅行も忙しいし、同好会の集まりだつて悪い。そもそも千鶴だって、高体連の練習はどうしたんだろう。

いくつか会話をしたあと、啓一くんはそれじゃあとあたしにお別れのハグをした。

そして、千鶴にハグ。

じゃあねと手を振つて、あたしたちはそれぞれ、ボードをスクリバッグの中にしまいこんだ。

「おっす、おつかれ」

「あ、雅行」

生徒会が終わつたらしい。雅行も「帰宅のよつで、あたしたちに気づいてやつてきた。

「どう? 執行部、順調?」

「微妙だな」

苦笑しながら、彼は千鶴にハグをする。ボードはもう片付けてしまつたけれど、同じ学校の生徒なら、校外でもハグをするのは珍しくなかつた。

「今日はなにもなかつたか？」

あたしにハグをしようとして、雅行は寸前で止める。朝のあの発言を思い出して、舌を出して「ごめん」と笑つた。

「うん、大丈夫。別に止められたりしなかつたよ」

「そつか」

同好会がてきて初めて外で活動したとき。あたしたちは見事警察官にとめられた。何も知らない人たちから見ればFREEHUGSは十分怪しい活動で、高校に連絡が行つたことも何度もある。最近ではそれもなくなってきたほうだけど、同好会は数々の問題があつたおかげで、今年の学校祭は出展の許可がおりなかつた。

「雅行もハグやってくれの？」

「いや、もう帰るよ。千鶴も同じ時間ので帰るんだろう？」七海は電車乗らないからいいよな

「わざわざ乗り継いでまで羽生高選んだ雅行たちのほうが珍しいんだよ」

あたしを見る雅行の目が、すこしづかりいつもと違う。なにかを言いたくて、でも我慢しているようなそんな感じで、あたしは居心地悪く身じろいだ。

もしかしたら、皆一くんとハグしていたところを見られたのかもしない。

「じゃあ、また明日ね」

雅行の視線から逃げるようになり、あたしはふたりに背を向けた。

雅行のことを意識しあじめたのはいつからだらう。考えて、あたしはすぐに答えが出た。

ちょうど一年前の、今。学校祭前だった。

入学当日から、ハグ・ハグ・ハグの嵐。

噂には聞いていたけれど、予想を上回るハグの多さに驚いていたあたしが、ようやく学校になってきたのは六月の宿泊研修が終わってからだった。

けれどそのときはまだ、自分からハグをすることはめったになかった。まだまだ、ハグという行為を受け入れることができずにいた。校門をくぐって、途中で千鶴に会つて、ハグ。教室の道までに千鶴の先輩に会つたときは、後ろでにこにこ千鶴たちのハグを見ているだけだった。

そして教室。ガラツと扉を開けたなり、あたしの目の前には雅行が勇ましく仁王立ちしていた。

雅行とはあまり関わりがなかつた。千鶴と同じ中学校といつことで何かしら交流はあつたけど、さほど仲良くもなかつた。そんな彼があたしの前に立ち、鋭い視線で見下ろしてきたかと思うと、ふいに愛嬌のある笑みを見せてくれたしにおはようと言つた。

『あ、おは』

返事をするよりも早く、あたしは雅行にハグをされていた。

力強い腕に抱かれて、身体がぴつたりと雅行にはりついた。彼の体温と、香りと、胸の音に包まれたのはほんの一瞬のことだつたけれど、離れてもその余韻はいつまでもあたしの身体に残っていた。驚きのあまり硬直したあたしに彼はもう一度笑つたかと思うと、千鶴とハグをし、すぐに離れて続々と登校してくるクラスメイトに片つ端からハグをしまくつていた。

なんかこのクラス全然ハグしていない。そう思い立つた雅行が、登校してきたクラスメイト全員にハグをしたのだと、あとで千鶴に聞

いた。

それにがっかりしたときには、もつ氣になっていたのだと思つ。雅行のおかげでクラスは次第に積極的にハグをするようになり、彼はクラスでも支持を集める人気者になつたのだった。

あのとき雅行が全員ではなく誰か特定の女子一人にハグをしていれば、今ごろ彼には彼女ができるて、あたしがこんな思いをしていたこともないと思う。

はじめは雅行とハグできることが嬉しくて、毎朝それが楽しみだつたのだけど。それがいつしか苦痛に変わるなんて、まったく思つていなかつた。

「七海、ちょっと

学祭準備で教室に残つていたあたしは、その声でようやく我に返つた。

「ねえ、七海つてば！」

ぱんぱん、と、机を手で叩かれる。顔をあげれば、そこにはふくつと頬をふくらませた千鶴がいた。

「学祭の打ち合わせしようつて、朝にチヅ言つたでしょ…」

「あ……ごめん」

千鶴は水色の指定ジャージを着て、袖口や顔のいたるところにボスターカラーのインクをつけていた。女バレの作業を抜けるのには少ししか時間がないから、時間厳守と言われていたはずなのに。

「どうせまた雅行のこと考えてたんでしょ」

「千鶴さまにはすべてお見通しですね」

あたしは席を立ち、千鶴に続いた。

学校祭までのカウントダウンも、よつやく一桁になつてきた。

羽生高の学校祭は、ひと学年のクラスが多いことから、学年ごとにやることが決まつてゐる。一年生は後夜祭で飾る大行灯の製作。

一年生は模擬店。二年生はステージ発表でのパフォーマンス。最後の順位づけは、全学年ではなく、学年ごとに決められる。

そうやってそれぞれ分担させるのは、各部活動でもそれぞれ学校祭活動があるからだ。部活の出し物はほとんど屋台などの金銭物が多く、その売り上げはどこも部費にあてるようになつていて。すると部活動の生徒はそちらに力を入れるわけで、自分のクラスの活動が多いと大変になる。だからそれぞれクラスの出し物はひとつと決めて、生徒に負担がかからないようにはからつての役割決めだった。

一学年は模擬店。あたしたち2Bはお菓子系にはしるらしい。男子は主に店の飾りつけと調理。華やかな女子が売り子と宣传。部活動に所属しないあたしはもっぱらクラスの模擬店に専念するほうで、メニュー表のデザインなどこまいましたものを受け持つことのほうが多かつた。

ちなみに、千鶴たち女子バレー部も屋台だ。

「先輩たちにお願いして抜けるの大変なんだからね」

「ごめんごめん。早く行こう」

廊下に出れば、模擬店の飾り付け準備や大行灯の材料運びやらであちこちに道具やダンボールがちらばつている。行き来する生徒も多く、あたしたちはその間をぬつて歩かなければならない。

それぞれ大変だけど、何より忙しいのは生徒会執行部だ。なんていつたつて、当日のスケジュールを管理するのが仕事なのだから。雅行も最近はへとへとのようで、クラスメイトにハグしながらそのままもたれかかることも多くあった。

千鶴に腕を引かれて、あたしは一階の談話室に向かう。その途中、声をかけてきたのは啓一くんだった。

「よ。順調？」

「まあまあかなー」

そつちはどう？ クラスの情報交換をしつつ、あたしたちはそれぞれハグを交わす。今年のパソコン部は、学校祭前から羽生高ホー

ムページに特設サイトをつけて、そのサイトで宣伝していた商品を

当田にオークション販売するらしい。

「啓一くんは当田、当番どうなってるの？」

「当番も何も、パソコン部は実際ほとんど活動しないんだ」

よくよく話を聞いてみたら、オークションは学校祭期間限定の生徒限定で、終了後高値がついている生徒に品物を渡すというものだつた。プログラムやらなにやらで学校祭前は大変だけど、当田は部室にこもって交代でオークションの見張りをすればいいだけなのだそうだ。

「女バレも今年は気合入れてるみたいだな」

「まあねー」

笑う千鶴の頬にはポスカがついている。それをぬぐつ啓一くんは実に紳士で、千鶴もそれに照れくさそうに笑っていた。

「当田になつたら手が空くから」

「うん、わかつた」

じゃあね。またハグをしようとする啓一くんの身体を、誰かが横から突進してさらつていった。

「俺も談話室で寝かせてくれー」

「ま、雅行……」

その大きな身体でよしかかるものだから、さすがに啓一くんも重たそうだ。田の下にぼつこりくまのできた雅行は疲労困憊といった様子で、学祭準備のストレスもそうとつためていて。あしたちの姿を見てすつとんできたのだろう、田には涙まで浮かんでいた。

「頑張れ、雅行」

啓一くんも、男子には冷たい。首根っこにしがみつく雅行を引き剥がして、今度こそじゃあねと千鶴にハグをする。

「じゃあね、なつちゃん。頑張つて」

「うん……」

あ、と気づくことは遅く、啓一くんはあたしにもハグをした。

雅行はよろめきながらも、ぱっちりそれを見ていた。啓一くんは

千鶴からあたしの一部始終を聞いていたはずなのに。いまさらながらそれを思い出したりしく、耳元でかすかに「あ」という呟きが聞こえる。

けれど啓一くんは、何事もなかつたかのよつにあたしから離れた。ここで下手に動けば雅行に感づかれる。しつぞりあたしにウインクをして、今度は雅行とハグをした。

あたしたちも何食わぬ顔で、談話室へと入つていった。

「……ハグ、しないんじやなかつたのか？」

やつぱりといふかなんといふか、雅行は作業の手を止めずに、あたしにそう尋ねてきた。

学校祭前々日。授業は今日までで、明日は完全に準備時間になる。すでに放課後になり、学校全体がフライングだけれど学祭準備を始めた。

生徒会執行部は連日作業に追われていて、早くも放課後から会場の飾り付けを始めるらしい。あたしは色とりどりのセロファンを大量に抱えて廊下を疾走する雅行に運悪くつかまり、問答無用で手伝うことになってしまった。

どうやら、廊下の蛍光灯の下にセロファンを貼つて、明かりの色を変えるらしい。脚立にのぼつて貼り付ける雅行に、あたしはセロファンやテープを渡していた。

職員室の手前まで作業がすんだので、突然先生たちがドアを開けて出でくるからびっくりする。中には作業中のあたしたちに「頑張れよ」と声をかけたりハグをしてくれる先生もいた。

「聞いてるか？ 七海」

「聞いてるけど、このセロファン破れちゃつてるよ」

彼に渡すつもりだつたセロファンをテープで補修しながら、あたしあつに来たと内心身構えた。

あの『ハグしない』宣言以降も、あたしはハグをしている。雅行とはしていなければ、同好会の子とは普通にしているし、クラスメイトとだつてしている。その様子を雅行は見ているわけで、どうも腑に落ちずに今まで悶々としていたのだろう。

いや、本来ならこれでいい。あたしは雅行とハグがしたくないだけ、ほかの人とはしても大丈夫なのだから。でも雅行はあたしが誰ともハグをしないものだと思っているわけで、だからあたしの行動は矛盾していると思っている。

「七海、ハグしないんじやなかつたのか？」

同じ質問を、彼は繰り返す。あたしは答えずに直したセロファンを渡したけど、それを貼る彼は、この話をしないと気がすまないらしい。

「なのに普通に千鶴とかハグしてるし、嫌だつたらはつきり言つたほうがいいって」

「なんだつたら俺から言つてやろうか？」

「いいよ」

居心地の悪さに、あたしはついそつけない返事をしてしまつ。自分でもわかるぐらい、胸の鼓動が早くなつていた。

貼り終えたセロファンがはがれないか確認して、雅行が脚立から降りる。真正面に立つて顔を覗き込んでくるので、あたしはとつさに顔をそむけた。

「いいよつて、それじゃあ七海このままいやいやハグ続けるのか？」

「ストレスたまるぞ？」

「これで全部終わつた？」

一階の廊下が全部終わつたのを確認して、あたしは脚立をたたんだ。

「七海……」

「じゃあ、あたし模擬店戻るから」

テープと脚立を雅行に渡して、あたしは踵を返す。これ以上話を

していたら、本当に泣き出しちまいました。

「待てよ」

体育館のほうから、女バレのにぎやかな笑い声がしてくる。職員室に用があるみたいで、赤いジャージを着た数人の一年生が、わいわい話しながらこちらに歩いてきた。

「七海。ちゃんと話、しようよ」

雅行に手首をつかまれて、あたしは戻ることができない。振りほどこうとしたけど、できない。力が強かった。

雅行に気づかれないうち、あたしはそっと深呼吸をする。吐き出した息がふるえた。

言えれば楽になるだらうか。いつも思つけど、どうしても声が出ない。雅行の反応がこわくて、どうしても言ひ出せない。

口を開けば、別の言葉が出た。

「……あたし、もうハグしないから」

「してたじやん、ずっと」

「雅行と」

えつ、と。彼はそう言ひたかったのだと思つ。でもそれは声になりきれず、息づかいだけが聞こえた。

あたしは雅行を振り向き、顔を見よつとして、できずに視線を足元に落とした。近づいてくる女バレの子たち。手にはたくさんの中リントを抱えていた。

「……わかつた」

その子達が、こちらに気づく。なにやら不穏な空氣を察したのか、話し声がいくぶん小さくなつた。

「じゃあ、俺ももうハグしない」

手首をつかむ手に、力がこもる。その痛みに、あたしは涙がにじんだ。

つかまれた痛みではない。いつものあの、胸を刺す痛みだ。

自分から言い出したことだというのに、涙が出そうになる。泣くまこと唇を噛むと、ふいに雅行があたしを引き寄せた。

「」の学校で、そんなことされるのは当たり前。だから遅れて走ってきた女バレの子も、あたしたちをちらりと見て、驚きもせずに過ぎていった。

あたしは雅行に抱きしめられていた。

驚きに硬直して、あたしは雅行を振りほどくことができなかつた。はつと我に返つてみても、腕の力がまた強くて、そう簡単に抜け出しができない。

今まで、雅行にこんなに強くハグされたことはなかつた。千鶴に比べたら全然なのに、息がつまるほど、苦しい。

「俺、七海以外とハグしないから」

ほんの一瞬のことであるはずなのに。雅行が離れるまでの時間が、とても長く感じられた。

「だからもうほかのやつとハグしない。手伝ってくれてどうもな。

一階は一人でやるから」

離れた手は、あたしが抱きしめてくしゃくしゃになつたセロロファンを抜き取る。雅行は何事も無かつたかのように、脚立や道具を拾い上げ、いつものゆつたりとした歩調で一階へと歩いていった。しつれいしますと、間延びした声で職員室に入っていく女子たちが、入る寸前、あたしをちらりと見ていた。

## 3

学校祭前日。みんな準備のために、いつもより早く登校してきていた。

あたしもすこし早めに登校して、教室ではなく談話室に向かった。作業を進める時間が足りなくなってきたからだ。

一度教室に行つて荷物を置こうか迷ったけど、雅行と鉢合わせるのがこわくて逃げてしまった。下駄箱に外靴があつたから彼はもう登校済みだけど、きっと生徒会の仕事をしているから教室にはいなはばずだった。

予鈴が鳴つた頃には帰つてくる。そのとき雅行は、みんなへの挨拶をどうするつもりなのだろう。

『俺、七海以外とハグしないから』

その宣言が本当なら、きっと雅行はみんなのハグを拒否する。ただでさえあたしの宣言があつた後のことでのことで、クラスもそれなりにあたしと雅行の関係に気を配つていてるというのに。これ以上変化があつたら、それこそ視線がこわい。

千鶴はまだ、学祭準備にはいれない。女バレはたしか早朝練習中で、外からかすかにランニングの声が聞こえてくる。

ケータイをマナーモードにしないと。視線を画面に向かながら談話室の扉を開けると、ふいに声をかけられた。

「おはよ、なっちゃん。早いね」

「……おはよ」

啓一くんだった。

彼はソファーに座り込み、長テーブルの上に置いたノートパソコンを覗き込みながら朝ごはんを食べていた。コーヒー牛乳のストローをくわえながら、あたしを見てにこりと笑った。

「邪魔だつたら出るけど？」

「つうん、平氣。むしろあたしのほうこそ、邪魔だつたら出でてくれど……？」

大丈夫、と言しながら啓一くんがサンドイッチをかじる。おはようのハグをする気配はなく、あたしもそのまま向かいのソファーに座った。

「『めんね、行儀悪くて。でも朝』はん食べないと力でないんだよ」「もしかして、いつも朝ごはん飯食べてるの？」

「いや、今日だけ。昨日ジラ配りして疲れてさ、寝坊してあわててすっこんできただよな。朝のうちにやりたいことあつたからさ」

眼鏡をくいとあげて、真剣なまなざしで啓一くんはキーボードを叩く。作業の邪魔をしないよう静かにしていよつかと思つたけど、意外にも彼のほうから話しかけてくれた。

「そつち、順調？」

「なんとかね。学校祭には間に合わせるよ

「女子は細かい作業で大変そうだね……」

応接セットの長いテーブルに次々道具をならべていくあたしを見て、啓一くんは手を細める。どうぞ、とアーモンドチョコレートを一粒くれた。

「こっちもなんとかすんでるよ。僕らも肉体労働でへとへとだけど、学校祭が明日だと思つと、なんだかドキドキしてくるんだよね」あいかわらずパソコンをにらんだまま、啓一くんは淡々と喋る。いつも穏やかな彼がドキドキする様子なんて思い浮かばなくて、あたしは思わず笑ってしまった。

「でも学校祭つてあつという間だよね。準備してるときが一番樂しいんだつて、あたし毎年あとから氣づくよ」

「雅行は早く終われつて昨日うめいてたけどね」

雅行。思わぬところから名前が出て、あたしはマジックを握る手を止めてしまった。

俺、七海以外とハグしないから。

その言葉が、昨日からずっと、離れない。

抱きしめられたあのとき。雅行の力強さ、汗の香り、息づかい。ほんの一瞬のことだったはずなのに、深く頭に残ってしまっている。

事実上、あれは雅行の告白だった。

いつてしまえば、あたしと雅行は両想い。あのときあたしも喜んでこたえればよかつたものを、受け入れられなかつた。

あたしは雅行のことが好きだ。そしてたぶん、雅行もあたしのことが好きだ。でもどうして、こんなに落ち着かないのだろう。嬉しいことであるはずなのに。どうして喜べないんだろう。

「……なつちゃん?」

突然黙り込んでしまったあたしを、啓一くんが不思議そうに見つめてくる。それに曖昧に笑ってみせるけど、彼だって千鶴からある程度聞いているはずだった。

「僕でよければ、話、聞くぐらにはできるよ? あまり参考にはならないだろうけどね」

そう謙遜して笑う啓一くんに、あたしはありがたく甘えることにした。雅行がどうのとか込み入った話じゃなくて、このぐるぐると巡る思考をどうにかして止めたかった。

「……啓一くんは、どうして羽生高に行こうと思つたの? やっぱり、ハグしたかったから?」

予想した質問とは違つたのだから、啓一くんはきょとんと目を丸くする。でもすぐになつちの意図を察してくれたのか、キーボードから手を離してこぢらを見た。

「僕は家に近いから羽生高にしたんだよ。なつちゃんと同じ」

啓一くんの答えは意外だつた。同好会を作るぐらいなんだから、てつくり千鶴や雅行と同じく、ハグが大好きで入学したと思つていたのに。

「ハグするのとか、抵抗なかつた?」

「最初はあつたよ。でも、慣れたらむしろ大歓迎だつたかな?」

彼の言葉に、何か裏がある。それを察してしまつたあたしが深く訊こうか迷つていると、啓一くん自ら話してくれた。

「正直、最初は下心だつたんだよね。女子とハグしたら、やわらかかつたりいいにおいがしたり胸があたつたりするから。……なつちやん、僕も男なんだよ」

ぽかんと口を開けるあたしに、啓一くんが苦笑する。そんなことわざわざ言わなくてもいいのに、と思つ心は彼も知つていて言った

わけで。

「でもね。そういう人がいるつていうことも、知つておいたほうが多いよ。実際、チヅだつてそういう人に会つたりしたから」

「あ……」

この間のFREEHUGSのとき、千鶴が言つていた人のことだ。あのとき真つ先に千鶴を助けたのは啓一くんで、彼もやはりそのことを覚えていたのだつた。

「もちろん、すべての男がそうじゃないからね。雅行を見てたらわかるでしょ？ 純粋にハグしてくれる人のほうが多いんだよ。僕もいろんな人とハグしたり、ハグするの見てたりして、それに気づいたんだ」

残りのコーヒー牛乳をすすつて、啓一くんは一息つく。登校する生徒が続々と作業を始めたのか、廊下の賑わいが聞こえてきた。「で、偶然見たテレビでFREEHUGSを知つて、ネットで調べてさ。動画の中でハグしてる人たちが、みんなすごく幸せそうにしてて、それで僕もやってみたいと思つたわけ」

その動画は、あたしも見せてもらつた。

もとは、アメリカの一人の青年がはじめたのがきっかけだつた。彼の母親は、たくさんの人々を抱きしめてどんなに『あなた』が大切であるかを伝える素敵な人だつた。そんな母を亡くし、大切なことに気づいた青年が、『FREEHUGS』と書かれたボードを持つてマイアミの海岸を歩いたのがはじまり。そしてその輪は今、世界中に広がつてゐる。啓一くんのように、動画を見て影響を受けた人は多い。かくいうあたしだつてその一人だ。

「もともと学校ので、ハグの楽しさは知つてたからさ。チヅとか雅行とか、ハグが好きそうな人に声かけたら一つ返事でOKしてくれたんだよね」

「へえ、知らなかつた」

また一粒チョコをもらつて、あたしはかりかりと食べる。パソコンの画面で時刻を知つた啓一くんが「戻ろうか」と立ち上がつたの

で、結局あまり作業はできなかつた。

「チヅとか雅行がハグしてるの見てたら、なんかこっちまで楽しくなるんだよね。ハグする自分も楽しいしさ。なつちゃんもやつ思つ？」

「思うよ」

そつか、と啓一くんはまた笑う。本当に彼は落ち着いていて、よく気がつく。あたしが考えていることを、それとなく察してくれていた。

談話室を出て、先に啓一くんと別れて。自分の教室に戻ろうとして、あたしは雅行が先を歩いているのに気がついた。

「はよー、雅行」

誰かが雅行を呼ぶ声。それにおはようと返しながら、雅行が教室に入つてゆく。あたしが教室に入るのをためらつてると、後ろから誰かに猛烈なタックルをされた。

「おはよう！」 七海

「あ、千鶴……」

「啓一と談話室で作業してたんだって？ 言つてくれたらチヅも行つたのに」

いつもどりおはようのハグをして、あたしは千鶴のあとに続いて教室に入る。うつむいて教室を見まいとするあたしの様子に気づいたのか、友達とハグを交わしている千鶴が首をかしげた。

おはよう、おはよう。いろんなところで声がする。それはいつものことでの、挨拶なんて誰もがすること。雅行もそれにこたえている。けど、ハグはしていない。この田で見ていなきけど、空気でわかる。教室が戸惑いの空気に満ちている。そりやあそうだ、雅行がハグをしないなんておかしなことだから。

「おはよー、雅行」

「はよ、千鶴」

千鶴がハグをしようと動いて、あたしはようやく顔をあげた。先に自分の席につこうとしていた雅行に、千鶴が腕を広げてハグしようとする。

「わり、遠慮しとく

けど彼は、それを拒んだ。

千鶴もそれに戸惑っていた。そしてはつとした様子で、あたしと雅行を見比べた。

「おはよう、七海」

「……おはよう」

あたしに気づいた雅行が、近づいてくる。ハグをしようとする前の、ただの挨拶の時点なのに、あたしは彼の顔を見ることがありますらできなかつた。のばされた手からも逃げた。

それだけで、クラス中が事態を察したようだつた。

ざわめくでも視線を交わすわけでもなく、ああなるほどかと納得したような、安堵の息のようなものが日々に漏れる。なにがあつた、ではなく、そういうことか。ハグをめぐる色恋沙汰は珍しくないし、それでいちいち騒ぎ立てるのをみんなはしない。

雅行は無理にハグしようとはせず、あきらめて席についた。あたしも大人しく自分の席に座つた。

背中に、視線を感じる。もしかしたら見ていないのかも知れないけど、雅行がいると思うと、どうも見られているような気がしてならなかつた。

「七海……

後輩から聞いたのかも知れない。千鶴が声をかけてくる。

あたしはそれに、ただ曖昧に笑うしかなかつた。

いまさら雅行になんと言えばいいのか。

あたしはトイレの鏡を前に、ボサボサの髪に櫛をいれる。はねたところに水をつけようと蛇口をひねると、指先をすりぬけた水は、排水溝にたまつたほかの生徒の髪の毛の間を力なく流れていった。

たつた一言、簡単な言葉であるはずなのに、どうしてあたしはそれが言えないのだろう。「好き」とひとこと、あたしはどうぞつして言うことができないんだろう。

すき。そう、二文字。ただ、雅行にそう伝えるだけなのに。言わなくて、雅行は態度で示してくれたのに。

いまさらあたしも好きだなんて、言えるわけがない。

前髪のはえぎわに、一キビをひとつみつけた。恋をすると女の子は綺麗になるというけど、あたしは恋に悩んで肌や髪がぼろぼろになっている。鏡の中の情けない顔を見て、よけい気がめいた。なんでこんなに苦しいのだろう。いや、自分で自分の首を絞めていることぐらいわかつて。でも、今更どうすればいいのだろう。深いため息をつき、あたしはトイレから出た。

廊下に出てまず、学校の変わりぶりに啞然とした。売り子が着る衣装の仕上げを手伝つてから被服室を出て、トイレに行つた。そのわずかな時間で、廊下や各教室はパラレルワールドに変わつていた。肝だめしをするクラスは教室中に暗幕をはりめぐらせ、ゴミ袋でなにやらのれんをつくつている。中華料理の店を出すクラスは、驚くことに入り口に朱色の鳥居をたてていた。

ちなみにあたしたちのクラスはお菓子の家になる。モデルはヘンゼルとグーテルで、提案したのは意外にも男子たちだった。かわ

いらっしゃいお菓子を作るのもまた男子の仕事で、あの「じつくて大きな手でフルーツパフェやチョコタルトを作るのだ」といつから、想像するだけで笑ってしまう。

すこし時間ができた。教室に戻るとして、あたしは足をとめた。クラスのみんなの、詮索を入れはしないけど好奇心に満ちたあの視線。あれが非常にいたたまれない。

談話室に行こうかな。あたしはまたひとつため息をついて、階段を下ることにした。

「あ、七海」

でもこうこうときにかぎって、会いたくない人と会ってしまう。両手にたくさん模造紙を抱えた雅行が、足取りおぼつかなくのぼつてくる途中だった。

「ちょうどいいや。手伝つて」

「えーっ」

嫌だ、と言つてしまえばそれだけのこと。けど、あたしはできない。何より雅行がいつもと変わらない様子で話しかけてくるのだから、変に拒んでしまうことのほうがおかしいに決まっている。

「どうしたの、こんなに大量に」

あたしはしぶしぶ、模造紙を受け取った。

「屋上から垂れ幕にするんだよ。生徒会も人手不足だからさ、これ全部俺ひとりでやんの。頼むから見捨てないで」

代々、生徒会執行部は学校祭になると鬼に変わる。両手に道具を抱えた役員を見たら逃げ出したほうがいいと言っていた……。いつもしてつかまつてしまふから。

結局あたしは屋上まで荷物を運ぶのを手伝い、おまけに垂れ幕を取り付けるのも手伝う羽目になってしまった。

「雅行……それ、字、逆じやない？」

「ああ、本当だ」

変な心構えをする以前に、雅行はもうへとへとだった。一年といえど、生徒会では下つ端になる。こき使われているかと思えば、い

やいや二年はもつと重労働だ。

「このままここでさぼりだおしたい……」

「でも仕事はたんまり残ってるんでしょ！」

背の高い屋上のフェンスにしなだれかかる雅行に活を入れ、あたしは模造紙の中から羽生高等学校祭の大きな布幕を見つける。そしてその下に隠れていたものを見て、あなるほどどうなずいた。

「だから雅行はこの係になつたわけね」

「それはいいから、ちょっと、こっちおさえてよ」

ふいに吹いた風に垂れ幕をさらわれそうになつて、あわてて雅行がしがみつく。あたしも手伝つて、一人で屋上にもんどうつた。

垂れ幕は当日垂らすらしく、準備は丸めた状態のものを紐でくくつて設置するだけ。それでも各クラスの宣伝文句や部活動のPRなどなど飾るものが多く、ひとりでは本当に大変な作業のようだつた。「あー、よかつた七海がいて。昨日に引き続き、協力に感謝します」「そんなお化けみたいな顔されてたら、誰だつて手伝うと思つよ」

深々と頭を下げる雅行にひらひらと手をふつて、あたしはフェンスから校舎を見下ろした。思いのほか疲れる作業に汗をかいしているので、すこしここで風にあたつていたい。

学校祭準備は着々と、校舎外にもすすんでいた。校門には雅行がポスカまみれになつて作った看板が。校門から玄関へと続く道では、部活動の屋台が並び始めている。グラウンドの真ん中にはキャンプファイヤーの場所取りでロープが設置されていて、そのまわりでは出来上がつたクラスから順に、行灯の土台を組みたてはじめていた。明日はついに学校祭。去年は初めてのことだらけでいっぺいぱぱいだつたけど、二年目の今年ならすこしさは楽しめそうな気がする。

「あの窓から風船てるクラス、あたしたちのとこじゃない？」

屋上から見下ろしていると、どこがどの教室かわからない。けれど開け放つた窓から色とりどりの風船が紐につながっているのは間違いないあたしたちのクラスで、そういうえば朝に男子たちが顔を真つ赤にしながら空氣を入れていたのを思い出した。

「どれどれ？」

「すぐそこの……あ、飛んだ」

つないでいた紐が切れたらしく、風船がボロボロと外にこぼれだした。かすかに、悲鳴が聞こえてくる。風にあおられて、ヘリウムが入つていなくて風船は空を舞つた。

「あーあ、どうするんだろう、あれ」

フェンスに指を絡め、あたしは深く校舎を見下ろす。もたれかかっていたフェンスがふいにきしんで、はつと気づけばもう遅かつた。

「ちょっと、雅行！」

「なに？」

「なにじゃなくて！」

フェンスにもたれるあたしを逃がすまいと、雅行はあたしに覆いかぶさるかのように、両腕を突き出してフェンスに手をついていた。彼は腕が長いから、あたしがいるスペースもそれほど狭くはない。けれどまるで後ろから抱きしめられているようで、あたしの身体は自然とこわばつていた。

「どいてよ

「やだ

「やだじやなくて

「だつてハグしてないじゃん」

あたしは身体をぴつたりとフェンスに預けて、できるだけ雅行から離れようとした。もちろん顔なんて見れるわけがない。ただうつむいて、風に揺れるスカートの乱れるプリーツを見つめていた。

「別にハグしないつたって、近寄るなって言わたわけじゃないし」まるで耳元でささやかれているような気分だ。あたしはフェンスに絡める指の力をいつそう強くして、あとがつくんじゃないかというぐらいい頬を押しつけた。

こんなときでも、胸の鼓動は高鳴る。じきじきしている自分に腹が立つ。赤くなる頬に、身体は正直なのだなと思い知った。

「じゃあ……近寄らないでよ」

「どうして？」

「嫌なの」

「なんでも」

「嫌なの…」

半ば怒鳴るような声をあげたあたしに、雅行の手が緩んだ。

「なんでだよ。今まで普通に、ハグだってしてただろ」

「してたよ」

「なのにどうして突然……」

「嫌だったの」

雅行の手が離れる。それを確認してから、あたしはよつやく、彼を振り向いた。

「嫌だったの、雅行とハグするのが」

「じゃあどうして今まで……」

「言えなかつたの！」

瞳が泳いで、顔を見ることができない。彼のネクタイ、ワイシャツの襟、ズボン、ブレザーのボタン。視線が動いて定まらない。

「言えなかつたの。ずっと、黙つてたの」

雅行のこぶしは強く握られて、ふるえている。そしてふいに動いたかと思つと、あたしは肩をつかまれた。

「離してよ……っ！」

「いやだ」

「離してつてば！」

助けを呼ぼうにも、屋上には誰もいない。普段は立ち入り禁止で、しかも鍵を持つているのは雅行ひとり。どんなに叫んでもこの声は誰にも届かない。グラウンドからも、あしたたちの姿は何をしているかわからない。

雅行はじつとあたしを見つめていた。けれど、あたしはその顔を見返すことができない。何とか腕を振りほどひこつと試みているうちに、雅行の影があたしを覆った。

唇を押し付けられて、歯がぶつかりかちりと鳴る。あつという間に抱きすぐめられて、また唇をふさがれた。

「……！」

首をよじって、キスから逃れる。抵抗しようと/or>して、力の差をありありと感じた。

「はなして……！」

今までの雅行は、とてもやさしくハグをしていてくれた。あらためて、それに気づいた。

「そんなん……嫌か？」

低く、絞り出すような声。耳元に息が当たって、あたしは背中がかつと熱くなる。

胸が強く痛んだ。こうして雅行の腕の中にいることが、とても嬉しいはずなのに。それ以上に、痛みのほうが強い。

抱かれている痛みじゃない。抱かれることで感じる、心の痛み。胸を鋭くどがつた爪の先で、何度も何度も刺されているような、そんな痛み。

この痛みが消えない限り、あたしは雅行を受け入れることができない。

受け入れたいと思っているのに。わかっているのに。でも痛みだけが、どうしても消えてくれない。

「嫌なの！」

叫びながら、あたしは自らの胸をかきむしった。

「嫌なの嫌なの嫌なの！ ハグするの、嫌なの！」

まるで子供みたいだった。何度も何度も繰り返すと、そのたびに

雅行の力が増して、あたしの声が次第にかすれていく。

「七海……」

「嫌！ 嫌なの！」

どうしてこんなに痛いんだろう。ハグをしても、それを拒んでも、どうしてあたしの胸はこんなに騒いでばかりなんだろう。

どうしてあたしは、素直に好きと言えないんだろう。

「……わかった」

雅行が、離れる。それに安堵の息をついたはずが、あたしの胸はいぜん苦しいままだった。

「「めん。もう、しない」

名残惜しそうに、ゆっくりと肩から手が離れる。踵を返そうとする雅行の表情を、あたしはようやく見上れることができた。

「まさ……」

「じゃあ、俺、戻るな」

一瞬、目が合つ。その雅行の表情。疲労困憊で、今にも泣き出しそうで、ふとした拍子に崩れてしまいそうな、そんな弱々しい表情。唇を噛みそうで、それをこらえるような。ふるえる身体をおさえよう。瞳が揺らいで、まぶたにたまる涙をこらえるような。

「雅行……」

彼は決して振り返らうとせず、屋上から出て行つた。バタンと扉の閉まる重い音がして、あたしは力が抜け、その場に膝をついた。

痛い。

苦し紛れに、あたしはリボンをはずす。でも痛みは消えない。そんなのわかってる。

不思議と涙は出なかつた。むしろ、今自分がしたことに呆然としていた。

雅行を傷つけてしまった。

その事実に、今になつてようやく気がついた。

彼はあたしを好きといつてくれたのに。  
あたしはそれを拒んでしまった。

「……もう、やだ」

「ハンクリートの上にぺたりと座り込んで、あたしは咳いた。頭をかきむしって、両手で顔を覆う。ようやく田頭が熱くなってきたけど、やっぱり涙は出してくれなかつた。

どうして自分はこうなんだろう。

タイムマシーンに戻りたい。

ううん、そんなことしないでいい。

戻つたつて、いざれはこうなつてしまひじだつたから。

「どーして七海は、それをチヅに相談しないかなー！」

「だつて、お互忙しかつたでしょ」

まあそりやそなんだけど、千鶴は咳ながらカレーのじやがいもをほおばつた。

「はんははへえ……」

「食べるか喋るかどつちかにしようよ」

最後の一 口を豪快に流し込み、千鶴は「ちやつとも手を合わせる。そして牛乳を飲み干してから、あらためて「なんだかねえ」と言つた。

「七海は、本つ當に不器用だよね」

「そうだね……」

あたしは食欲がなくて、残した。小さな折りたたみテーブルの上には、二人ぶんのカレーと牛乳と、サラダの入つたお皿が並んでいた。

学校祭の前日準備もどつにか終わり、あたしの家には千鶴が泊まりに来た。電車でけつこうな時間がかかるところに住んでいる千鶴は、明日の朝早くからのハードなスケジュールを考えて、学校に近

「いたしの家に泊まることになったのだ。

もちろん明日の朝だけではなく、今日も夜通しする作業がある。それをふたりで片付けるためにも、缶コーヒーとガムをたくさん買い占めて、今日は徹夜を決め込んでいた。

「今日は雅行、啓一のとこに泊まるはずだよ」

「そつか。啓一くんも家近いもんね」

あちらではあちらの作業がある。はたして男子一人で徹夜となると、一体どんな会話が生まれるんだろう。

「これから行ってみる?」

「今日は作業をするんでしょうが」

空になつたお皿を台所にさげ、あたしたちはそれぞれ手に道具を持ち、あーでもないこーでもないと討論しながら作業を開始した。ただし。テレビはつけっぱなしで魅惑のお菓子もならべ放題だから、作業効率はあまりよろしくない。

「……ねえ、七海」

「なに?」

「七海は、雅行のこと嫌いなの?」

訊かれて、あたしは手を止める。手に持つたマジックが乾いてしまわないよう、ふたを閉めた。

「嫌いじゃないよ

「嫌いじゃないなら、どうして拒むの?」

手の甲にも平にも指先にも、いたるとこつこついた色とりどりのインク。それをティッシュでこすりながら、あたしは必死に言葉を探した。

テレビ画面の向こうでは、バラエティ番組の笑い声が聞こえてくる。とつさに会話をそちらにずらそうとしたら、勘のいい千鶴に消されてしまった。

「七海としかハグしないって言つたつてことは、雅行は七海のことが好きって言つたってことなんだよ?」

「それは……わかってる」

「つむぐあたしを覗き込むように、千鶴が顔を近づけてくる。さつき食べたカレーと一緒に、やっぱり、たんぽぽの香りがした。

「七海も、雅行のことが好きなんでしょう？」

「好きだよ」

その答えに迷いはなかった。あたしは雅行のことが好き。それはどんなにこらえたとしても、あふれ出てきてしまつ感情だった。

「好きなのに、どうして？」

「あたしも、よくわかんなこの」

もしあたしが千鶴だったら。きっと迷わずに自分の気持ちを伝えることができたのだと思つ。

「じゃああたしは、どうして言えないんだろう。どうして拒んでしまつんだろう。」

「七海は、ハグするの、嫌いなの？」

「嫌いじゃないよ。最初は苦手だつたけど、今は羽生高等学校にきてよかつたなつて思つてる」

もし違う高校を選んでいたら、あたしはハグをすることもなかつたし、千鶴という友達もできなかつた。FREE HUGSという活動も知らなかつた。

なにより、雅行と出会つこともなかつたんだから。

「ただ、雅行とハグするのが、なんかだめなんだ……」

「だめつて、どんなふうに？」

「こうね、ここからんが、すごく痛くなる」

自分の胸をとんと指さして、あたしは苦笑した。

痛みの原因はわかつてゐる。これは雅行のことが好きな気持ちだつた。

「最初はさ、ここがきゅんつてなつてたの。ハグしたときとか、話したときとか、田があつただけでもそつなつて、すごく嬉しかつたの」

「でもね。あたしは言葉を切る。千鶴は唇を変な形にまげて、何か言いたそうなのをこらえていた」

「そのうひ、雅行がほかの子とも……千鶴とハグしてゐるのを見る  
だけでも、ここがざわつくようになつたの。きゅんつていうのをと  
おりこしてさ、痛くなつて、その痛みがどんどん強くなつて、自分  
とハグするときもそういうようになったの。それで、我慢できなく  
なつて……」

「だからそれは、雅行がほかの子たちとするのが嫌だつたんじょ  
？」

「自分にされるのも嫌なの」

「自分もほかの子と同じなのが嫌だつたんじゃない？ やけやけや  
いで、自分が特別になりたかったんじゃないの？」

千鶴の言ひ「ことはそのとおり。彼女はあたしよりもうんど、いろんなことを知つてゐる。

あたしはただの、恋愛臆病者だ。

「雅行がほかの人とハグしないつて言つたつてことは、七海が特別だつてことなんだよ？」

「それは……わかつてゐる」

「じゃあどうして、それを拒むの？」

千鶴の口調は、まるで子供を諭すようだつた。七海ちゃん、どうしてそんなにへそまげてるの？ みんなと一緒に遊ぼうよ。

「だつてあたし、雅行が好きなんだもん」

意味がわからないと、千鶴が首をかしげた。

「あたし、雅行が好きなの」

雅行が好き。なにより、ハグをしているときの雅行が好き。

朝、みんなにハグをする雅行。同好会で駅前に行つて、小さな子や他校の生徒や、いろんな人にハグをする雅行。ときには仲間とじやれあつて、ふざけあつてハグをする雅行。

ハグをしているときの、あの笑顔が好きだつた。身体を離して目があつたときの、あの純粹な笑顔が好きだつた。見ているこちらまで思わず笑つてしまふような、そんな明るい雅行が好きだつた。

「ハグをしてるのが好きなのに、なのにそれをあたしがとりあげるなんて、おかしいもん」

「七海……」

ほかの人とハグするのが嫌。自分が一番じゃないと嫌。でもそれはただのあたしのわがまだ。ハグをしている彼を見て好きになつたのに。雅行が何より大事に思つてているハグをとりあげてしまふんで、あたしはなんて矛盾してるんだろう。

「こんなにわがままなのに、雅行と付き合つとか、そういうのが許

せないの」

ひどく捻じ曲がった心だと思つ。雅行を独り占めしたくて、ほかの子と話しているのも嫌で、それぐらい独占したくて。そんな自分がひどくなじくれている気がしてならない。

うつむくあたしの頭を、千鶴がそつと撫でてくれる。そして何度かあたしの名前を呼び、いつもとはまるで違つ、やわらかいハグをしてくれた。

「だいじょーぶ、七海。恋する女の子はみんなそうなんだよ

「千鶴……」

「チヅだつてそうだもん。好きな人には自分のことを見てもらいたいって思うし、誰かほかの子とハグしてるの見るとやつぱり、相手が七海でもむつとしちゃうことだつてあつたよ。それは普通のことなんだよ」

そういうえば、千鶴の好きな人つて誰なんだろう。自分のことばかりで、あたしは全然気づかなかつた。

「そんなに思いつめなくて大丈夫だよ。チヅから見たら、七海はわがままなんかじやなくて、恋に悩むか一わいい女の子だからねつ。だからそんな顔しないで。あたしを抱きしめたまま、千鶴は身体を揺らす。まるでゆりかごのようなやさしい揺れに、あたしはそつとまぶたを閉じた。

「……雅行は、あたしの気持ち知ってるのかな？」

「知らないと思うなー。雅行は七海と同じで、不器用で鈍感だから

ね」

ぐすくすと笑う千鶴の吐息が耳に響く。これじゃあ本当にあたしは赤ん坊だ。けれど千鶴の腕の中はとてもあたたかくて、あたしは安心して身体をあずけることができた。

「でもあたしは、雅行みたいに明るくないよ

「そつかなあ……」

うーんと、彼女はなにやら思案している。「これを話すべきか話すまいか。ふつくらとした唇をもじもじさせて、やがてあたしに口を

開いてくれた。

「チヅも雅行も、わざわざ遠い中学からハグ高選んだでしょ？ 雅行はね、中学校の頃は、今みたいにはつりつとはしてなかつたんだよ

「……そうなの？」

「別に暗かつたわけでもないんだけどね。でも絶対、自分からハグするようなやつではなかつたんだ。チヅが思うに、雅行、いつだか自分からみんなにハグしたことあつたじゃない？ あのとき心の中ではすごい緊張してたと思うんだよね」

一年前の、あの朝の日。あのとき交わしたハグがなかつたら、あたしはきっと雅行のこと好きにならなかつた。

「でも雅行、その前からも千鶴とすごい仲良かつたじゃない」

「それは中学が一緒だつたからだよ。七海の目にはそう映つたのかもしれないけど、まあ雅行も知らない人たちの輪に入つて、とっさに知つてるチヅに声かけたんだろうね」

雅行が高校にあがつてから積極的に動こうとしたこと、千鶴は特別なにかを言うこともなく普通に接していた。彼女の口から中学の雅行のことを聞いたのは、これが初めてだった。

「雅行も雅行なりに、いろいろ考えてたと思うよ。だからきっと、七海にしかハグしないつて言つたのだつて、ちゃんとした意思があつたからだと思うの」

「そう、だよね……」

その雅行を、あたしは拒んでしまつた。傷つけてしまつた。そのことが何よりも今、心に引っかかつてとても辛い。

屋上で重ねた唇の感覚は、やわらかいというよりも、あたつた歯の痛みのほうが強かつた。唇も切れていたようで、今は乾いたところからかすかに血の味がする。

あんな雅行見たことがなかつた。あれほど感情をむき出しにして、傷ついた表情もあらわにすることなんて今までなかつた。いつも笑つてゐるから柔軟に見えるけど、本当は鋭いまなざしを秘めていた

ことを知つた。

あの、泣き出しそうな瞳。それがまぶたに焼き付いて離れない。

「雅行にあやまらなきや……」

「あやまる? どうして?」

「だつてあたし、雅行のこと傷つけちゃつた」

そうかなあ。千鶴は呟きながら、あたしから身体を離した。

「だつて七海だつて、傷つけたくて傷つけたわけじゃないんじよ? 別にあやまることじやないと思うけど」

「でも……」

「まあ、これはチヅと七海の考え方の違いかな?」

肩をすくめて、千鶴が身体を離す。複雑な表情を浮かべるあたしの顔を覗き込んで、両手で肩を叩いた。

「んじや、作業の続きしょつよ。明日までこいつぱい作らなきや」

そして最後にひとつ、ハグ。

そのハグは彼女らしい、力強くて優しい抱擁だった。

ついに学校祭当日になり、開け放たれた校門から他校の生徒や保護者がたくさんはいつてくる。いつも授業中はしんとしているはずの廊下が、今日はとてもにぎわっていた。  
わが2Bの模擬店は、そこそこに繁盛していた。  
とにかく客層を若い女の子に絞つたおかげで、店の内装も外装もお菓子の家とともにかく甘い雰囲気で統一されている。さらに店に出すデザートも甘くしたら、なぜだか体重を気にする女子よりも、疲れた身体に栄養補給する男子たちがたくさん集まってしまった。

前売り券のぶんをのぞいた当日売りも好調で、午後の部での完売も見込めそうだ。

あたしは午前の部の売り子担当で、よつやく交代を終え、つまみぐいしそぎてお腹いっぱいになつた身体をずるずると引きずつて教室を後にした。

店がお菓子の家なら、やつぱり売り子はヘンゼルとグレーテル。でも多すぎてもいけないので、魔女もいる。あたしの衣装は魔女用で、サテン生地の真っ黒なマントを頭からすっぽりとかぶつっていた。ちなみに中はいつもの制服だけど、あえてマントは脱がない。そもそも学校祭当日は私服OKで、気合を入れて浴衣を着てきたクラスメイトもいた。でもあたしがこうして魔女の格好のままでいれば、いやがおうでも目を引いて、お菓子の家の宣伝にもつながるのだから脱がない手はない。

千鶴とは開会式まで一緒にいたけれど、各クラス・部活動との活動になつたところで別れた。女バレの屋台で、たしか千鶴も午前の売り子担当だつたはずだ。

啓一くんのオーケーション監視も午前中で、もう交代したはず。みんなで時間を合わせていた。雅行はさすがに生徒会で無理だらうけど、どうせやるならみんなでやりたい。

リノリウムの廊下を歩くたびに、マントがひきずられて衣擦れの音がする。魔女の手には赤いりんごが入つたカゴを持たされたけど、これじゃあ白雪姫の世界だ。それと一緒にあたしは大きなバッグを肩に下げ、途中で前売り券を買つていた商品をもらひながら、玄関へと向かつた。

靴を履き替えていると、体育館からベース音が響いてくる。スクールだとたしか今はバンド発表とカラオケ大会だけど、あたしはそれには田もくれなかつた。ローファーのかかとを直すのもどかしく、校舎から出た。

まず玄関に、学校祭のポスター。それから校門までの道に、各部活動の屋台。女バレーは焼きそば屋台で、サツカーパー部のたこ焼き屋の

も入り混じつて、ソースの香りが校庭に広がっていた。

さすがに校舎から出ると、魔女を見てみんなが驚いていた。でもあたしは気にしない。きょろきょろとあたりを見回して、約束の印を探していた。

「 いた」

校門近くの千鶴に、大きく手を振る。千鶴は魔女のままのあたしを見て笑つたけれど、頭上にボードを抱えてぴょんぴょんと飛び跳ねていた。

「 七海、後ろ、見てみて！」

「 後ろ？」

言われて、あたしは振り向く。けび、屋台やお祭さんのはかには何もない。首をかしげると、「もっと上！」と言われた。

上。なんだろう。風にはためく学校祭の垂れ幕を見て、あたしはすぐに、気づいた。

「 さすが、雅行」

思わず、口からこぼれる。千鶴を真似して、あたしも両手を上にあげた。

フェンスの根元に取り付ける垂れ幕は、当田にあらわれる。その役目も雅行の仕事。だから雅行はそのとき、このゲリラを敢行したのだ。

end

校舎の端から端まで、フーンスは広くはりめぐらされている。そこにかけられた垂れ幕。羽生高学園祭とか、2Bメルヘンづくりのお菓子の家、とか。

そんな垂れ幕を覆い隠すよつこ、黒い布がいくつもかけられた。

I HUG YOU !

背の高いフーンスをまるまる使つた、遠くから見ても良く目立つ文字。この校門をぐぐつた人が、一番最初に目につく、迫力のある黒い文字がそこにはあった。

雅行の担当はこれだった。生徒会と並行しながら、この巨大文字を作る。そして当日、垂れ幕を下ろすと一緒に、この文字もとつづけた。たぶんあのはがれかかっているところは「ミミ袋だ。

「七海、ほら、早く出して！」

「あ、うん！」

千鶴にせがされて、あたしはバッグからいくつも紙を取り出した。画用紙、スケッチブック、ダンボール。色とりどりのペンで、いろんな言葉をこめて、それを飛び入り参加の人たちに配つて歩く。書いている言葉。それはあたしたちがいつも、駅前で掲げている言葉。

FREE HUGS

学校祭の活動許可がおりなかつたあたしたちFREEHUGS同好会は、じつしてゲリラでFREEHUGS活動することを計画していた。

校門のほかにも、いろんなところで会員たちが活動をおこなっているはず。あたしたちの担当はこの校門前。学校祭に来てくれる他の人や保護者の人たちに、FREE HUGSを知つてもうのが狙いだつた。

活動をしているうちに、ほかの生徒たちも混じつてくれていたらしい。ボードをひつたくつたサッカー部の男子が、店の看板と一緒に、ボードを掲げている。するとたこ焼きを買ってくれた小さな男の子が興味を示して、部員とハグをした。

そんな光景が、あちこちで見られた。

「I HUG YOU !か……懐かしいね」

「この学校の生徒はみんな、最初にこれを見るからね  
今日の千鶴はソースの香りがする。彼女の言つとおり、羽生高の生徒は入学式のときに、必ずこの文字を目にしていた。

本当はフーンスじゃなく、校門に面した三学年の窓なのだけど、さすがにゲリラで三年の教室に忍び込むのは難しい。来年は三学年の教室にあがつたあたしたちが、まったく同じ言葉を窓ガラスに貼り付けて、新入生の歓迎をする番だつた。

「……なつちゃん、それ、コスプレ？」

「あ、こわかった？」

啓一くんの活動は、自分や学校のHPで、学校祭の日にFREE HUGSをしますよ！と宣伝すること。同好会の頭は、それぞれ役割を持つてこの日に臨んでいた。

「いいよいよ、その格好のままハグしようよ」

笑いをこらえながら、啓一くんがあたしに腕をまわしてハグをする。頬にFREE HUGSのペイントをした啓一くんも、いつもより浮き足立つているような感じがした。

千鶴ともハグをして、あたしは彼女の肩ごしに、花壇を見る。いつもは学校の入り口で鮮やかな花壇だけど、今日ばかりはその役目もお休みだつた。

そのレンガの上に、腰をかけている人がひとり。手にボードを持

つて、ぼんやりと、学校祭にやつてくる人々をながめていた。  
あたしは彼を見て、ぽつりと呟いた。

「……雅行」

雅行はあたしに気づかず、ボードにあごを乗せて、いつものあたしのようにただ人通りを眺めていた。

「もしかして雅行……ハグしていないの？」

「していないよ。誰とも」

そもそもこのゲリラは雅行の計画だったのに。

やりたいやりたいと言いだしつぺだつた雅行は、誰よりも大変な仕事を引き受けた。衣装を縫う女子たちが、魔女用の布が少ないと言つていたけど、たぶんあれは雅行の仕業だ。

誰よりも今日を楽しみにしていたはずなのに、雅行はまったく動いていない。てっきりあっちこっちでハグをしまくっているものだと思つていたあたしは、ただただ見つめることしかできなかつた。あたしとしか、ハグをしない。

彼はいまだに、あの宣言を守り続けていた。

本当は活動をめいっぱい楽しみたいはずなのに。うずうずと落ち着かないようで、お尻りが動いている。けれど決してその場から立ち上がりらず、ボードをかざしたりして、主にお婆さんの目を引くことに専念している。

屋台の人たちに協力してもらつて、千鶴は昨日あたしとつくつた飾りを取り付け終えていた。無地のTシャツに殴り書きしたり、風船にかわいらしくペイントしたりして、とにかくいろんな飾りを用意した。FREE HUGS。その言葉があちこちにあつて、みんな興味深そうにしている。

どれも、雅行の提案だった。彼が言わなければたぶんできなかつた。その彼がやらないなんて、おかしな光景だつた。

もちろんそうなる原因をつくつたのはこのあたしで。雅行がした

いことを、彼が生き生きと輝く瞬間を、あたしが抑えさせてしまつてゐるわけで。

みんなと話して笑いあつ陰で、雅行が「こつそりとため息をついていた。あいかわらず顔も身体もボロボロで、そういうえば生徒会はどうしたんだろう。

言わなくちゃ。雅行に、ハグをしてと言わなくちゃ。

好きなことを我慢しないで。

雅行は、好きなことをしているときが一番、輝いているのだから。あたしはボードを胸に抱えて、彼に近づいた。

近づいてきた黒ずくめの魔女を見て、雅行は一瞬、驚く。けれどそれが仮装したあたしだと気づいて、すぐに立ち上がつた。

「七海、その格好……そつか、模擬店か

「生徒会は、いいの？」

「いいんだ。俺、これをするために前日までがむしゃらに頑張ったんだし」

眠い目もすっかり冴えてこりのよつて、その瞳はらんらんと輝いている。そして彼はあたしがなにか言ひよどんでこることに気づいて、「ん？」と首をかしげた。

言わなくちゃ。

でも、ここまで来るともつ、何を言つていいいんだかわからない。

「……ななみ？」

雅行が近づいてくる。一步、一步。どうしようで頭がいつぱいになつて、あたしはとつとつ、ボードを前につきました。

おっ、と、雅行が驚く。あたしが使い続けているスケッチブックのハグボード。それを盾のよつとして、あたしは雅行と距離を置いてしまつ。

ちらりと顔を見ると、雅行はにこりと笑つてくれた。どうして昨日の今日で、そんな表情ができるんだろう。どうして何事もなかつたかのよつこ、あたしに接してくれるんだろう。

胸が、つまる。かつと熱くなつて、いつも痛みによく似ている。

それをなだめようと一息ついて、あたしは顔をあげた。

「雅行……これ」

「これ？」

意味がわからず、彼はまた、首をかしげる。だからあたしは、もう一度、ボードを突き出す。

どうして素直に言えないんだろう。どうしてあたしはここまで意地つ張りなんだろう。

ふるえる手に力をこめて、あたしはボードを片手に持ちかかる。両手を広げて、文字を見せるように、いつものようにハグのアピールをした。

雅行はようやく、はっとした表情を浮かべた。その鈍さに思わず、あたしは笑ってしまう。そして雅行に一步、近づいた。

おそるおそるといった様子で、あたしたちは歩み寄る。むしろ雅行はほとんど動いていなくて、あたしの歩幅のほうが大きかった。

戸惑っていた雅行も、ボードを置いて、腕を広げる。でも、自信がないようで、そのままかたまつっていた。

あたしは自分から、雅行に腕をまわした。

「七海……？」

ぎこちなく、彼は腕をまわしてくれる。まるで、初めてハグをした人同士のようだった。

遠慮がちな弱々しい力を、ほんのすこしだけこめて、雅行を抱きしめる。そしてすぐに離れて、上目づかいに彼を見上げた。雅行はきょとんとしていた。まるで何があつたかわからないうつだつた。そして真っ赤になるあたしの顔を見るうちに、ようやく理解して、ぱっと笑顔になった。

そして今度は、雅行からハグ。それは控えめではなく、思う存分といったような、そんな力がこもっていた。

ハグと一緒に、挨拶のように頬と頬をすりあわせてくる。そしてまた離れて、目があつて、思わずふたりで笑ってしまった。

「あたし、雅行が好き」

彼が口を開く前に、あたしは言った。

「雅行が好きなの」

傷つけてごめんなさい。

雅行、もう、我慢しないで。

言つべきことはたくさんあるはずなのに、はじめに口を出したのはそれだつた。

なによりまず、伝えなければ。雅行は伝えてくれたのだから。あたしも伝えなければ。

でも何の言葉よりも、こうして抱き合えることのほうが、気持ちが伝わる気がした。

雅行の腕の中で、また、あの痛みがぶり返す。けれど彼の鼓動を聞くたびに、それがおさまってゆくのがわかる。

どうしてだろう。あれほど落ち着かなかつたはずの腕の中にいるのが、一番安心するなんて。

雅行の鼓動が、とても早い。息もふるえている。汗の香りに包まれて、でもそれが嫌じじゃない。

痛む胸が次第に麻痺して、心地よくなつてくる。ああこれが、好きという感情なんだなとしみじみ思った。

こわかつたの。やきもちやいてたの。ずるいことに、あたしの口からはそんな言葉も出でこない。また身体が離れて、あたしたちは手をつないで向かい合う。なんだか照れくさくて、下を向くと、また抱きしめられた。

みんなが見てる。そんなのどうでもいい。だつてみんな、ここではハグをしているのだから。

雅行の肩からちゃんと目を出せば、あたしたちのハグを見て驚いた人たちに、ほかの会員が声をかけている。看板を見せて、どうですか？ 興味を持つてているのは他校の子で、一人の子が勇気を持って飛び出し、ハグをして興奮気味に戻つていった。

長い長い抱擁を続けるあたしたちは、さすがに目立つていうようだつた。でもそれにつられて、みんながハグをしている。まるでハ

グの連鎖反応で、気づけば千鶴と啓一くんもハグをしていた。

そのハグを見て、あたしはおやと思う。千鶴が啓一くんの首に腕をまわして、人目もはばからずキスした。そうかふたりは付き合っていたんだ。

思わず、ふふふと笑ってしまう。二人に背を向けている雅行はそれに気づかないまま、まるであたしを味わうように、耳元に唇を寄せてくる。

言わなきやいけないことがたくさんある。  
でも、もう少しだけこうしていい。

七海、と、声になりきらない声でそうおしゃかれて、あたしは優越感に浸つてしまつ。雅行がハグをする人々はみんな、こんなことされないように決まつている。

雅行がまた、身体を離す。彼もまた何かを言おうとして、でも言葉が見つからないみたいだつた。

何か言わなきや。そう考えている雅行が、あたしは無性に愛しく思えてたまらない。

「好き」

あたしは雅行の首に手をのばし、すこしだけ背伸びをする。

「あたし、雅行が好き」

ささやきながら、そっと、唇を重ねた。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5732j/>

Hugging You!

2010年10月8日15時24分発行